

心ある生活を!

さちあ

創刊号

発行 黄檗宗青年僧の会「大阪の集い」の有志
 教化布教紙研究会事務局
 霊龜山九島禪院
 〒550 大阪市西区本田3丁目4-18
 TEL 06-582-5772

ガンの告知

—— 信仰心と生きがい ——

先日の新聞記事によると、日本癌学会で「ガンを告知する方が患者にとって良い」とする研究内容を発表して注目を集めた。

それによると、末期ガンの場合、ガンを告知されていた二十人と告知されていなかった二十二人について死の直前の心理状態を調べたところ、告知された患者の八十五％は特に精神状態に変化はなく、安定した状態で死を迎えた。しかし、告知されなかった患者の五十九％は不安や興奮状態を示した。

一方、これとは別にガンが進行している状態の患者については告知された二十七人のうち十人は闘病しながら仕事を続け、六人の患者は死後に残す家族の生活設計についての準備までした。しかし、告知されなかった患者三十六人のうち大半の三十四人は、死ぬまで闘病生活に終始したという。

こうした結果から、ガンの告知は、ガンではないかという疑心から解放されることで患者の精神的負担を軽減させむしるガンの告知により、患者は死ぬまでに残された貴重な時間を有意義に過ごせることを実証している。

黒沢明監督の映画に「生きる」がある。主人公の志村喬が、雪の降る公園でブランコに乗りながら「命短し、恋せよ乙女」と歌いながら死んでいくシーンを強烈に覚えている。定年間にガンを宣告され、残された日々を何か一つ「生きた」証しを得たいと、子供たちのために小公園作りを奔走する。それが完成した最後のシーンである。定年は会社勤めの人間の必ず行きつく先である。日本人にとって定年とは人生の終わりと宣言されるくらい重いものを持っている。会社のために滅私奉公で働き、まるで人生のすべてが仕事のように思い込んでい

る人が、定年を迎えると、たちまち生きがいをなくしてしまふ。主人公はそのうえガンで、短い命と宣言されてしまふ。打ちのめされた主人公は自暴自棄の生活を送るが、絶望のあとに一つの悟りを開く。これまでの五十五年の人生は何だったのか無に等しくはなかったのか。ガンを宣告されて命は区切られた。それならば、残された短い日々を今迄以上の密度で生きてみよう。残された日々を公園作りのために鬼神のごとく奔走する。そして、残された日々を真に「生きる」ことによって主人公は生きがいを見つけ得る。

この夏、ガン患者たちがガンと闘いながら、ヨーロッパのニューズが話題になったが彼らも、いわば「死の宣告」と



もいえるガンを宣告され、絶望の日々から、登山によって「生きがい」を取り戻し、闘病生活に希望を持って居るそうだ。

確かに、ガンは死亡率が大きいが、死亡率100%ではない以上、闘って奇跡的に勝てる確率だってある。たとえガンに負けたとしても、それでも

よいのではないだろうか。結果よりも、雄々しく闘った毎日に意義があるのだ。なぜなら、人生そのものが、人間はいつか必ず死ぬのだから、その意味では結果的に敗北を宿命づけられている。したがって、人生には結果などどうでもよい。ガンに罹っても、それで人生が終わったのではない

く、残された余命を生きなければならぬ以上、ガンと闘いつつ生きるのが、我々の本当の生き方であろう。ともすれば絶望してやけになりかねない我々を、しっかりと内側から支えてくれて、充実した毎日をおくらせてくれるのが、信仰ではないだろうか。

達磨さまと武帝

○特集集・達磨居士心にちなんで○



十月五日は、禅宗の始祖と仰がれる達磨さまの入寂された日で、禅宗では、達磨忌と称して、荘厳な法要を営みます。

達磨さまは、正しくは菩提達磨(ぼだいだるま)といい達磨多羅(だるまたら)とも呼ばれていました。生まれは南インドの香至国の第三王子ともいわれています。

ある時、般若多羅尊者(はんにゃたらそんじや)といわれる、お釈迦さまから二十二代目の法を嗣けた僧がこの国へ立ち寄られ、宮中へ招かれました。尊者の説法に感激し

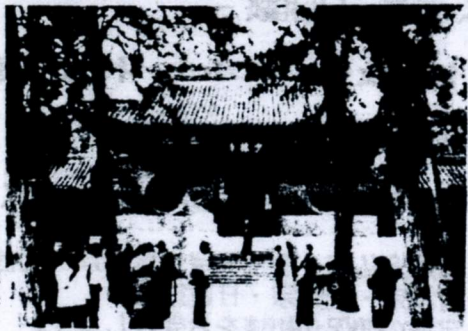
後に三人の王子に会った尊者は、この宝珠で三王子を試されました。「この宝珠は、まことに立派なものだが、この世の中でこれにまさる宝はあるか」と尋ねました。すると第一王子も第二王子も「これは無上の宝物で尊者のような徳の高いお方でなければ、とうてい受けることのできないものです」と答えました。ところが、第三王子で達磨多羅王子は一なるほど立派な宝物ですが、それよりお釈迦さまの説かれた法宝(ほうほう)の王は宝珠を贈りました。最

が最上だと思えます。正しい教えの道が何にも勝るこの世の宝です。尊者は、教える道を持っておいでになります。その道こそ尊い宝で、この世を照らす光明であり、一切の人間の心を明るくし、正しい生活の根本と成りましよう」と堂々と答えられました。尊者はすっかり感心されました。その後、般若多羅尊者の弟子になり、名を菩提達磨と改め修行に励まれました。約四十年間、尊者に師事され、尊者の滅後、中国に渡り高山(すうざん)の少林寺に

止住し、ここで九年間壁に向かい悟られました。「面壁九年」の故事や、梁の武帝との問答などはよく知られています。

武帝は深く仏教を信仰し、寺院を建て経典を研究し、自ら「般若経」「涅槃経」を講義できるほどの人物でしたが次のような問答が伝わっています。

武帝は、「朕は即位してから、寺院を造り、写経し、また出家をすすめて、仏法の興隆に貢献してきたが、どんな功德があるのか」と、達磨さまに尋ねました。すると、達磨



嵩山少林寺

さまは、「いずれの行為も功德などない」と、いとも冷然と答えられました。

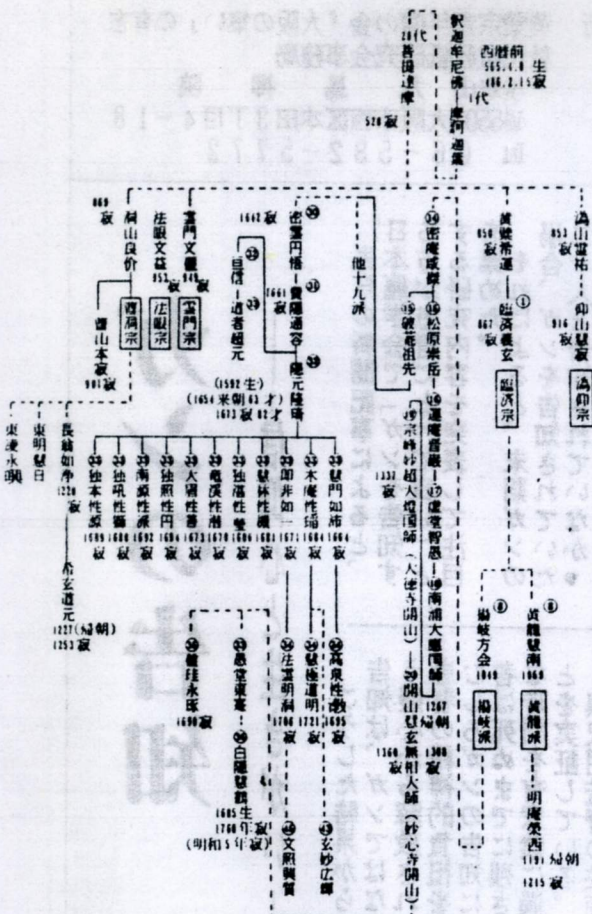
武帝にはその言葉の意味が理解できなかったのです。達磨さまは、造寺し写経すること、けつして無意味とは考えていません。泥で仏像を造り、無心に祈ることも、仏縁を深める種子をまくことであることを充分知っておられました。

しかし、武帝が造寺や写経や経典を解釈することが仏法だと思い違いをしていることを達磨さま見抜いておら

れました。ましてや、造寺の功德をもとめているのであれば、それは一種の「我執」であって、仏殿を造り、経典を解釈すること、仏法を行ずるということとは、別なことだということに、武帝は気づいていないと思つたのです。ましてや「我執」を満足させる行為を信心の名で美化しようとする醜悪さに、達磨さまは「無功德」と大声一喝されたのです。

今日の日本の禅は、法系図のように、勿論この達磨大師の流れを汲むものです。

鏡の前に立てば
自分の姿が写る
仏の前に立てば
自分の心が写る



福ダルマの由来
東嶽和尚と七転八起

我々の宗派(黄蘗宗)に少林山達磨寺があります。群馬県高崎市にある「福達磨」で有名な禅寺です。達磨寺は延宝五年(1677)水戸黄門で知られる水戸光圀公のすすめで、攝化僧・東草心越(とうこうしんえつ)禅師によって開創されたものです。

少林山と張子ダルマのかかわりは、この心越禅師が描いた一筆だるまの坐禅像(口絵参照)に由来しています。達磨寺の九代住職に東嶽和尚という禅師がいますが、この和尚は常日頃から農民の暮らしが少しでもよくなるようにと念じ、何かと農民の面倒をみてきました。ある年、大飢饉のため農民の生活は貧困のどん底になってしまいました。そこで和尚は農民救済のため、あれこれと案をめぐらしていましたが、心越禅師の一筆だるまの坐禅像にヒントを得て、和尚自らダルマの木型を造り、土地の農民に農閑期の副業としてダルマをつくらせ、正月七草の縁日に売り出されたのが高崎福ダルマの始まりとされています。

和尚は、ただ単に農民にダルマづくりをさせたのではなく、同時に、「怒ったり、恨んだりする心を起ささない」「常に忍耐の心を忘れない」ことを実践させた達磨大師の生活信念をダルマに託し、農民に心のよりどころや生きる喜びを与えたのです。「転んでも心配することはない。それくらいは失敗、かえっていい経験になったでやないか、転べば起き上がったってまた一から始めよ。そうすれば今度はそううまくいくようになる。心配することはないのだよ」と、人間の限りの偉大な力を与えてくれた達磨大師。この教えの素晴らしいが、七転八起(起き上がり小法師)の縁起になっています。



尚高崎達磨、別名「目なしダルマ」「折頭ダルマ」といわれています。両肩に「商売繁盛、家内安全、交通安全」といった願いが書かれています。こういった文字は他にはない特徴です。

仏教テレフォン相談室

——せいぜいご利用を——

先日放送されたNHK特集で「老いていま・青年僧と老人たちの対話」という番組をご覧になった方も多々あると思います。誰もが老いた後向かい合うことになる心の葛藤や悩み。都会に住む孤独な老人たちと青年僧との心の触れ合いを通して「生きる」といかに意味を深く考えさせられた番組でした。

欧米諸国では「ダイヤルフレンズ」という自殺を予防するための電話相談のシステムがあり、キリスト教の隣人愛の精神で、ボランティア活動が



活発になされていきます。一方わが国では、世界でも稀な経済成長のおかげで、心より物を大切にする風潮がひろまり、マザーテレサの言葉をかりると「日本は豊かだ。しかし、心は貧しい」という状態、人間性の欠如によるさまざまな問題が次々と発生しているのが現状です。

編集後記

仏教とえば、なにか抹茶香臭い教えと世間では思われているようですが、本来お釈迦さまがかれた教えである仏教は、きている人を対象にしたものです。生きていくうえで直す様な悩みや苦しみをか私達を救い、安心立命(あじんりつみょう)

らも、番組のように「仏教テレフォン相談」が、活発に行われています。大阪でも、下記のように、各宗派の青年僧が集まって電話相談がなされています。当紙の会員でもある自敬寺の服部隆志師も活躍されています。せいぜいご利用下さい。尚、私たちの宗派(禅宗)の当番は金曜日です。

を与えられるものです。お釈迦さま出家されたのは、四門出遊も譬(たと)えられているうちに、「人間はなせ生まれか、なぜ老い、病み、そして死んでいくのか。生きる」と何か、死とはなにか、人生かにして、この疑問を解決するの「こうした疑問から悩みを解決するためでし。ところが、私たちの八割が仏教徒だという現況にあながら、仏教の教えと異なる俗心がはばをきかせています。昨今の霊感商法にまでわれる部分は、まさかと思ひます。

正しいえに接する機会も少なく、るいは、お寺側の伝える努もなされていらないという反に立って、教化布教紙「さあ」を発売しまし

— 仏事 信仰 人生相談 —

大阪仏教テレホン相談室

TEL (06) 245-5110
ゴゴの110番
月曜日～土曜日 午後2時～5時(祝日を除く)

浄土宗・融通念仏宗・浄土真宗・真言宗・天台宗
臨済宗・曹洞宗・黄檗宗・日蓮宗
以上10宗派の僧侶が相談をお受けします。

た。紙名の「さちあ」は、インドの古い言葉サンスクット語で永遠の真理、法と意味です。お釈迦さまの説かれた法を意味します。なにぶん初めてのことでもあり、不十分なものしかできませんでしたが、「カストリ雑誌」(カストリとは戦後の密造酒で品質が悪く、2・3合も飲めば倒れてしまう)だけにはならなように、心の煩悩をカストリしたいと、精進したいと思っております。今後ともよろしくお願ひします。